

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の概要

【第3回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議資料】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の開催概要

- 日時：平成29年10月12日(木)午後0時30分から午後2時30分まで
- 場所：本町分庁舎(漁信基ビル)502会議室
- 議事：(1)第1回有識者会議・市町会議の概要について
(2)震災の記憶・教訓の伝承について
(3)伝承に当たっての視点について
(4)その他

○委員名簿

座長	今村 文彦	東北大学災害科学国際研究所所長・教授
委員	浅利 保	みやぎ観光復興支援センター副センター長【塚原センター長代理出席】
//	阿部 重樹	東北学院大学経済学部共生社会経済学科教授【欠席】
//	石塚 直樹	一般社団法人みやぎ連携復興センター代表理事
//	臼井 弘	気仙沼市自主防災組織連絡協議会会長
//	太田 倫子	一般社団法人キッズ・メディア・ステーション代表理事
//	小田 隆史	宮城教育大学附属防災教育未来づくり総合研究センター准教授
//	武田 真一	河北新報社防災・教育室長
//	宮下 加奈	一般社団法人減災・復興支援機構専務理事
//	宮原 育子	宮城学院女子大学現代ビジネス学部学部長・教授

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

(2) 震災の記憶・教訓の伝承について

(3) 伝承に当たっての視点について

① 震災の記憶・教訓の伝承の理念について

【繰り返さない】

○犠牲と困難を繰り返さないための体験・教訓・知見の継承に努めることは必要。幾多の混乱は地域内で、日本国内で、世界でも繰り返してはいけないということを基本にしたメッセージをきちんと伝えられるような方向性として欲しい。【武田委員】

○同じ犠牲を繰り返さないことや、混乱を繰り返さないというところが、一番大きな理念としてあるのではないか。【石塚委員】

○最も亡くなった方の多かった宮城県として、一人でも多くの命を救うための猛烈な反省を謙虚にして、発信していけたらいいのでは。【太田委員】

【情報発信】

○いかに情報を広く発信していくのかという文言なり姿勢なりがあってもいい。

【浅利委員代理：塚原氏】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

①震災の記憶・教訓の伝承の理念について

【自然災害と地域性・地域づくり】

○震災の記憶・教訓の伝承が、人間社会、地域社会の被害面から議論されるが、宮城の自然の特性をしっかりと知った上で色々なリスクに対処していくという、2段階の対応が必要だということ
を強調して欲しい。【宮原委員】

○地震・津波だけではなく、土砂災害や洪水などを含めた、自然災害というくくりの中で考えてい
かないといけないのでは。その中で、これからどうするか、どう備えていくかということの方が
大事なのではないか。【臼井委員】

○人づくり・地域づくりの中で、安全で安心な地域づくりを進めていくためのリスクを小さくさせるよ
うな、発展的なところも謳ってもいいのではないか。【今村座長】

【オール宮城】

○沿岸部だけではなくて県土全体を考えたものが必要。【宮原委員】

○震災を沿岸自治体だけのテーマでいいのか。内陸の自治体に、共有しきれていない、自身の
問題ではないという感覚が芽生えているのだとしたら、そこをどう酌み取るかが、今回の震災
伝承の非常に大きな課題。内陸の人達が共感できないやり方だと、宮城県としてという看板は
非常に危ういものになっていくので、関わりを検討していくのは大切な視点。【武田委員】

○沿岸部に主語があるというか、偏って聞き取れるというか、言葉の印象から受けるのは地域に
住んでいる人にスポットが当てられているのか疑問。【浅利委員代理：塚原氏】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

②今後の震災の記憶・教訓の伝承のあり方検討の進め方(検討フレーム)

【主体】

○もう少し具体的な主体が出てくるといい。ソフトで震災遺構を活用するとなれば、是非「観光」は入れておいていただきたい。【宮原委員】

○主体に地域の方が関わってくるような、具体的な書き方が必要。語り部だけではなく、被災をしていなくてもその地域で暮らしてきた人たちが教育に関われるようにすべき。【宮下委員】

○それぞれの主体がバラバラにやっているが、それ自体が本当に大きな力になり得ているのか。「誰が」を突き詰め、見極めていくのは重要。表の中の「誰が」のところが不完全であり、この詰め方が最大の課題になっている。【武田委員】

【時期】

○平時にどう伝えるかということ、有事にどう伝えるかということ、という切り口がある。有事、平時も含めてどう対応していくかというところを文化として整理していければいい。【石塚委員】

○フレームの中で、「いつ」というのも取り入れてもいい。【今村座長】

【県民意識】

○今現在の県民の意識はどこにあるのかというのは大事な視点。出発点は県民が震災をどう考えているのか。そのところを一つ確認してみたらどうか。相手がどう考えているのかということを手台にしながらか進めていかないと、一方的になってしまう。【臼井委員】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

②今後の震災の記憶・教訓の伝承のあり方検討の進め方(検討フレーム)

【組織】

- 教材づくりをする時にどこに資料を頼ったらいいのか、実際連れて行った時にどういう人から話を伺えばよいのかとか、誰に頼ってどのようなことが実施できるのか、どこかに集約して発信するような仕組みづくり、体制づくりが必要になってくる。【小田委員】
- 県外から宮城県または東北被災3県のお話を聞きに行く時に、相談するところがない。聞きに行きたいところ、紹介してくれるところが分からない。体制づくりにつながってくるかと思うが、そういった仕組みは必要ではないか。【宮下委員】
- 情報などを集約、整理、活用、発信する作業主体が見えないことへの不安・課題について、多くの方から指摘されている。【武田委員】
- 照会・相談がたくさんあり、それによってどういう反応があって、どの地域の人たちに何が伝わったのかという検証すらできない。そういうことをきちんとまとめてやっていけるような受発信体というのがやっぱり非常に必要で、それに付随するものとしての施設というものが考えなくてはいけないもの。【武田委員】
- 県を俯瞰して引っ張っていく組織なり組織体なりというのは間違いなく必要。今後どうしていくのかというのも検討していただきたい。【浅利委員代理:塚原氏】
- ロータリークラブやライオンズクラブといった地元の全国ネットワークの組織と一緒に仕組みづくりをしていくのも一つの案ではないか。【太田委員】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

③「誰に」伝承するのか

【県民向け・県外向け】

○県民の方と県外の方と明確に分けたことはすごくいい。【小田委員】

【世界向け】

○「誰に」の部分は、「世界に」という視点が必要。【宮原委員】

○「海外に」というところは必要なこと。3. 11の伝承の取組は世界に発信すべきもの。

【浅利委員代理:塚原氏】

【専門向け・一般向け】

○海外で防災を担っている人たち等の専門の方と、そうではない一般の方々の、それぞれのニーズに合うように分けた方がいい。これは「どのように」という形にも当てはまる。【小田委員】

【未経験者向け・未災者向け】

○経験していない人たちが学ぶことによって、「誰に」が「誰が」に変わることができるというサイクルが一つ生まれる。外から来る人たちも大事だが、地域にいる人たちへの教育もしっかりしていくべき。【宮下委員】

○未来につなげるという考え方の一つとして、震災を経験した被災者から未災の皆さんにきちんと情報を伝えていく。【太田委員】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

③「誰に」伝承するのか

【一定期間の滞在者向け】

○一定期間だけここで暮らす人たちとの共有というのは実は非常に重要。そういう人たちは全国に散り、発信者になり得る。一定期間過ごす人たちへのアピールや共有は大きな力になる。

【武田委員】

○震災遺構を見学する機会を作るなど、学生達が学ぶ、宮城に来たらみんな学生は学ぶものだという、学生文化が出てきたら非常に伝承は強い。【宮原委員】

【他地域向け】

○別の地域での災害復興に取り組む方々に、経験談を伝えていくことは被災地の責任として、重要である。【石塚委員】

【女性向け】

○被災された時に男性と女性という性差によって、色々な課題が浮き上がってきたと思う。地域に住んでいる人というくくりではあるが、地域で女性が直面した色々な困難、解決したことも付け加えてもいいのではないか。【宮原委員】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

④「何を」伝承するのか

【復旧・復興の全体像】

○応急対応や復旧だけではなく、今まさに進行している復興部分や、復興に寄与する観光なども含めて全体像を示し、伝えることが重要ではないか。【石塚委員】

【教訓・経験】

○過去からの経験というものをしっかりと伝承しておくべき。過去の災害の反省、教訓が3. 11までどう伝わっていたのか、活かされたのか活かされなかったのか、反省したのかというところも含めて、3. 11から後だけではなく、その前も考えていただきたい。【宮下委員】

○優先順位をつけるのであれば、皆さんが何を求めて宮城県に来るのかを考えるべきであって、それは知識・教訓。最も発信すべき事は、知識や教訓を知見として発信すること。【太田委員】

【伝承の結果】

○伝えた結果どうなったのかというのが結構大事。応急対応ではできたこと、できなかったことが伝えられているが、復興フェーズでは、できなかったところよりも、ちゃんとできたところを積み重ねて、伝えられるようにすることが重要。【石塚委員】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

④「何を」伝承するのか

【地域特性】

○総合的な大地震・津波の経験を有する地域の特徴というものをどう打ち出していくのかは考えなければならない。【武田委員】

【事象の起点という考え方】

○震災に関連する直接的な現象だけを伝えるのは非常にもったいない。震災が、様々な影響力を持った出来事であるという位置づけは、呼びかけた時に応えてくれる。2011年がそうした起点になり得るという共感が非常に説得力を持つ。すべてこれを起点に色々と考えたり、取り組んだりしなくてはいけない、基盤になる素材というところを盛り込めないか。【武田委員】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

⑤「どのように」伝承するのか

【伝承の手法】

○空間的に離れている中で、実際に来ていただいて、色々な遺構を見ていただいて、語り部の方と関わっていただいて知っていただくということと、実際には来ないが、例えばバーチャルな形に発信していく、という2つに細分化できるのではないか。【小田委員】

○何を伝えるのかという時には、聞きたい側のポイントを整理し、それに対応したプログラムを提供していくということが重要。【石塚委員】

○岐阜の子供たちと一緒に取材し、石巻に住む子供たちが震災から5年経って、実はあまり自分たちの被災の地域を見ていなかったことが分かり、双方にとって非常によい勉強の機会になった。【太田委員】

○伝承といった時のある意味方向性を感じるようなものプラス「震災体験、ないしは震災教訓、そこから考えたことを皆さんで共有しませんか」というニュアンスというのは、あらゆるものを考える起点になり得るといったところも含めて、ひとつのそれ自体がメッセージとなる。【武田委員】

【防災教育・防災学習】

○「防災教育」は、イコール子供たち、学校が対象というイメージ。「学習」という言葉でくった方がいい。子供たちだけが教育を受けてもまずい。地域全体の防災力を上げていくには、「防災学習」という視点で地域の方々も防災を学んでいくことをやった方がいい。【臼井委員】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

⑤「どのように」伝承するのか

【地域防災】

○子供たちが学んでいるのを見ながら、大人たちが一緒に学んでいかないと地域の防災力はアップしていかない。社会の一員として地域社会に向き合っていくような企業のあり方というのは、防災については非常に大切な部分。【臼井委員】

【語り部】

○語り部の話を聞いて、物理的に遺構などを見ることによって何か触発されるという仕組み、それをうまくやりとりできる教員の研修や育成も必要。【小田委員】

○ある被災地の語り部は、言葉が画一的になってしまって、台本通りにしかしゃべれない。こちらが違う質問をしたら答えられなくて、聞いたかったことが聞けないということも結構あったりする。ある程度の教育は必要だと思うが、画一的にならないような工夫を今後はした方がいい。

【宮下委員】

【アーカイブ】

○統一的なアーカイブがあった方がいいという話もあるが、すでに色々整備されている。コーディネートする力こそが実は必要だということが、アーカイブの課題。【武田委員】

第2回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議の主な御意見

⑤「どのように」伝承するのか

【施設等のネットワーク等】

○事実上のゲートウェイになっている仙台圏と最大被災地である石巻、三陸地方という、明確な2、3拠点と、個別の被災自治体をどのようにまとめて連携させていくのかというのが最大の課題で、そこにこそ伝承の「どのように」というところの要点がある。ワンストップであったりネットワークを作りながら広い被災地をしっかりと結んで情報の受発信をしながら、きちんと方向性を作っていくような伝承の取りまとめ方というのが宮城モデルといわれるものになっていく。

【武田委員】

○国営祈念公園との関わりをどう整理するのか、考えていかなければならないテーマ。

【武田委員】

○きちっとした拠点になるようなハード施設を整備していただきたい。【宮原委員】

○よそから来た方々にもここは多くの犠牲者が出た場所なのだとことを認識してもらい、鎮魂の想いを少しでも持ってもらえるようなお話の仕方をしていかないと、どんどん気持ちのずれがおきてしまう。【宮下委員】

○地元の人たちが災害について、私事として考えていく仕組みとしては、ジオパークの取組もかなり有効。栗原市の栗駒山麓は、ジオパークづくりの中で伝承するということを意識している事例。【宮原委員】